

D. G. ロセッティ

## 8 杖と袈裟袋

巡礼は尋ねた 「この土地を治めるお方は」  
「旅のお方 ブランシェリーズ女王様でございます」  
「誰がこんなに荒らしたのか」  
「これはルーク公爵の仕業  
やつに神のお怒りあれ」 5

巡礼は尋ねた 「あなたの家はどちらに  
よろしければ 休ませてほしいのだが」  
「焼けて黒ずんだ木の枝に昇ってごらんなさい  
丘のむこうにわたしの家が見えますよ  
まだそこも燃えているはず」 10

巡礼は尋ねた 「女王様にお会いするにはどの道を」  
「とんでもない 傷を負って  
ここに逃げ帰ることになりますよ  
地面に滴る血の跡で  
わたしの居場所がばれてしまいます」 15

「友よ どうか落ち着いて 神様はお護り下さるはず  
わたしがどこへ行こうとも 神様はお護り下さるはず  
神様はどこにも<sup>ましま</sup>在すのです」  
巡礼はこう言って 丘の中腹<sup>かたわら</sup>をゆっくりと巡り  
麓に降りた 20

女王は<sup>はた</sup>機のそばに ぼんやりと座っていた  
アラス織りのカーテンが揺れる音を聞いて  
悲しそうに目を上げた  
部屋の中は 麝香<sup>じゃこう</sup>と没薬<sup>もつやく</sup>の甘い香りで  
むせかえるよう 25

侍女たちは 二人ずつ組になって

もの言わず 羊の毛を梳いていた  
巡礼は恭しく膝を折った  
「女王様 お心安らかであらせられますように」  
女王は答えた 「あなた様も」 30

女王の目は 内に波のうねりをたたえ  
物腰は水際の葦のよう  
柔らかく 華奢な身体つき  
水音のように  
悲しげな声 35

荒れ果てた砂漠の道でも  
これほど甘美な湧き水を見つけたことはなかった  
パレスチナの照りつける日差しの中でも  
巡礼は これほどまでに  
陶然としたことはなかった 40

すぐさま 巡礼は思い出した  
夜ごとの夢の中で 女王の泣き顔を見ていたことを  
眠りに就いたその顔は  
彼が知る筈のない 女王の様々の美しい表情と  
重なり合っていた 45

巡礼は言った 「女王様 この国は火の粉をかぶり  
荒れ放題 誰もが敵との戦いを怖れています  
しかとこの目で見てきました  
お許しいただけるなら  
わたしが戦いに行きましょう」 50

女王は巡礼をじっと見つめた 「あなた様のおっしゃる通り  
国の荒廃は聞いています」  
巡礼は言った 「神のお力を信じましょう  
吉とでるか凶とでるかは  
神のみぞ知ること」 55

「あなた様に感謝します わたしの心は萎えています  
でも なぜ苦勞して墓を掘り

ご自分を葬ろうとなさるのです」  
ためらうことなく 巡礼は答えた  
「わたし自身の誓いのため」 60

「巡礼のお方 あなたの誓いは神の耳には届いても  
神の御心みこころには届かぬのでは」  
「誓いは誓い どこであれ神様はお聞き届けになるのです」  
巡礼は恭しく続けた  
「いつの時でも お聞き届けになるのです」 65

女王と巡礼は こうして語り合う間も  
じっと見つめ合っていた  
語り終えると 女王は不意に  
侍女たちを見回した  
まるで眠りから覚めたかのよう 70

女王は言った 「巡礼のお方 戦ってくださいますか  
心からのわたしの祈りを あなた様の護りといたしましょう」  
巡礼は侍女のひとりに囁いた  
「明日 女王様に  
この杖と袈裟袋をお渡してください」 75

女王は巡礼に鋭い剣を贈った  
腰に巻いた剣帯は  
女王の腕がまわされているかのようにだった  
女王にくちづけする代わりに  
巡礼は抜き身の剣にくちづけした 80

女王は巡礼に緑の旗を贈った  
一本の白百合が織り込まれていた  
戦う時に 槍に結んでおくためのもの  
女王にくちづけする代わりに  
巡礼はそれに女王の名前を書いてくちづけした 85

女王は巡礼に白い盾を贈った  
その上に遺言を書くようにと  
輝くばかりの美しい色を混ぜ合わせて盾に塗り

女王にくちづけする代わりに  
巡礼は金色に塗ったところに映る女王の顔にくちづけした 90

日が暮れて  
夕べも眠りにつく頃となり  
巡礼も女王の前から辞するため  
胸ふくらませて  
今一度 日の沈み行く西方<sup>にしかた</sup>を見た 95

そこには 日没の空が  
巡礼には見知らぬ土地のように広がっていた  
その彼方には 明日乗り込むはずの戦場<sup>いくさば</sup>が  
見えはしないが  
夕闇に包まれているのだ 100

翌日 女王と侍女たちは日暮まで祈り続けた  
戦況がどうなのか  
知る者は誰もいない  
使いはよこさぬようにと  
女王は命じていたから 105

女王は顔青ざめ 侍女たちの心も痛む  
パイプオルガンに合わせて  
弱々しくも美しく歌うは  
朝の祈り  
暁の祈り 九時の祈り 110

父なるお方 祈りは届いておりますか  
使いの天使はうかがいましたか  
私たちは  
一心不乱の寝ずの祈りで目がかすみ  
断食で目眩がしますから 115

女王たちに届くには 司祭の声は弱々しく  
まるで夢<sup>ゆめうつ</sup>現で聞くかのよう  
聖歌のうた声が弱まり 終わるころ  
最後の和音は

- まだ こだましているかのよう 120
- 「あんなに赤く輝く光は何でしょう  
日没からずいぶん時が経ったのに」  
一番若い侍女が一番年上の侍女に言った  
「はや薄暮<sup>はくぼ</sup>  
なのに あの光の大きなこと」 125
- 一番年上の侍女が言った 「目がかすんでいるから  
空に炎が上がったように見えるだけ」  
女王は顔をあげてじっと見た  
「あの輝きは  
戦場の松明<sup>たいまつ</sup>」 130
- 「昇り広がるあの音は何でしょう  
今までは 物音ひとつしなかったのに」  
一番若い侍女が一番年上の侍女に言った  
「一番遠い丘のところまで  
あの音は響いている」 135
- 一番年上の侍女が言った 「感覚が鈍っているのです  
たくさんのお讃歌を歌ったから」  
女王は息を殺して聴いていた  
「あの音は  
勝利の雄叫び<sup>おたけ</sup>」 140
- まず初めに 兵士たちの関<sup>とき</sup>の声  
それから 埃と炎  
それから 馬が大地を揺らす音  
それらの怒涛<sup>ただなか</sup>の直中に  
もの言わぬ一行が到着した 145
- 「戦場から何を持ってきたのです  
そのように枝に隠して」  
「今宵 女王様の客人が戦に勝って戻られました  
でも 女王様のお城では  
勝利の宴<sup>うたげ</sup>は要りません」 150

「顔を見せて」と女王は言った  
「ああ 束の間に変わってしまって  
あんなに明るかった顔色が 今は真っ青  
ああ 神様 ああ 神様の御慈悲を  
顔を覆ってさしあげて」

155

手に握られた剣は その刃<sup>やいば</sup>は折れていた  
そこは巡礼がくちづけしたところ  
「ああ 役立たずの脆い鋼<sup>はがね</sup>  
ああ 耐えていたわたしの心も もはやこれまで  
一生懸命祈ったけれど」

160

血にまみれた緑の旗が 彼の口を覆っていた  
そこは巡礼が女王の名前にくちづけしたところ  
「東に西に 北に南に  
わたしの旗ははためいて なんとということ  
死神の手引きをするなんて」

165

盾の色模様はずたずただった  
そこは巡礼が女王の顔にくちづけしたところ  
「何でも与えられるのに  
死神だけが最後に残り  
わたしの贈り物になるなんて」

170

その時 ひとりの侍女が歩み寄り  
泣きながら こう言った  
「女王様 巡礼様のご遺言がございます  
この杖と袈裟袋を  
女王様にお持ちくださいますようにと」

175

その夜 杖と袋は女王の枕元に掛けられて  
朝まで 涙でぐっしょり濡れた  
何年も何年も 女王の枕元に掛けられて  
巡礼の形見は床を護った  
五年間も 十年間も

180

その夜 女王の激しい嘆きに  
枕元に掛けられた杖と袈裟袋が揺れた  
毎年毎年 木の葉を散らす風が吹けば  
形見が揺れて  
巡礼の言葉が聞こえてきた 185

ある朝 女王が目覚めたときに  
心を慰める巡礼の言葉が  
袈裟袋の中にあるのではと思い付いた  
だが 見つかったのは古い香油と  
棕櫚しゅろの葉くず 190

お城うたげの宴 華やかな槍試合や舞踏会のとき  
離れたところで 杖と袈裟袋は揺れていた  
狩のときも お城で揺れていた  
平和のときも争いのときも  
女王は自らの立場を貫いた 195

女王が死んだ今 杖と袈裟袋は  
薄暗い礼拝堂で 突風にあおられ揺れている  
二度と起きない女王は  
(白く小さく きれいに墓石がつくられて)  
巡礼が残した杖と袈裟袋とともに眠っている 200

時経て今 女王の側 神みまえの御前に  
鎧兜に身を堅めて 立派な騎士よ 立つがよい  
今と同じくあの時も 神はどこにも在ましますお方  
今と同じくあの時も  
あなたの誓いをお聞き入れくださったお方 205

時経て今 馬上槍試合の試合場は  
明るく輝く天の幕屋に造られる  
あなたのみごとな盾が掛かっており 誰も否定することはない  
ラッパが高らかに宣言すること  
女王は騎士の恋人であること 210

時経て今 神は

永遠の平和のうちに ここ天国で  
嫉妬深い神として在<sup>ましま</sup>すお方  
だが 生前の祈りには  
報いられるお方

215

(中島久代訳)